

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

メディアクリエーション演習 (金曜日特別授業)

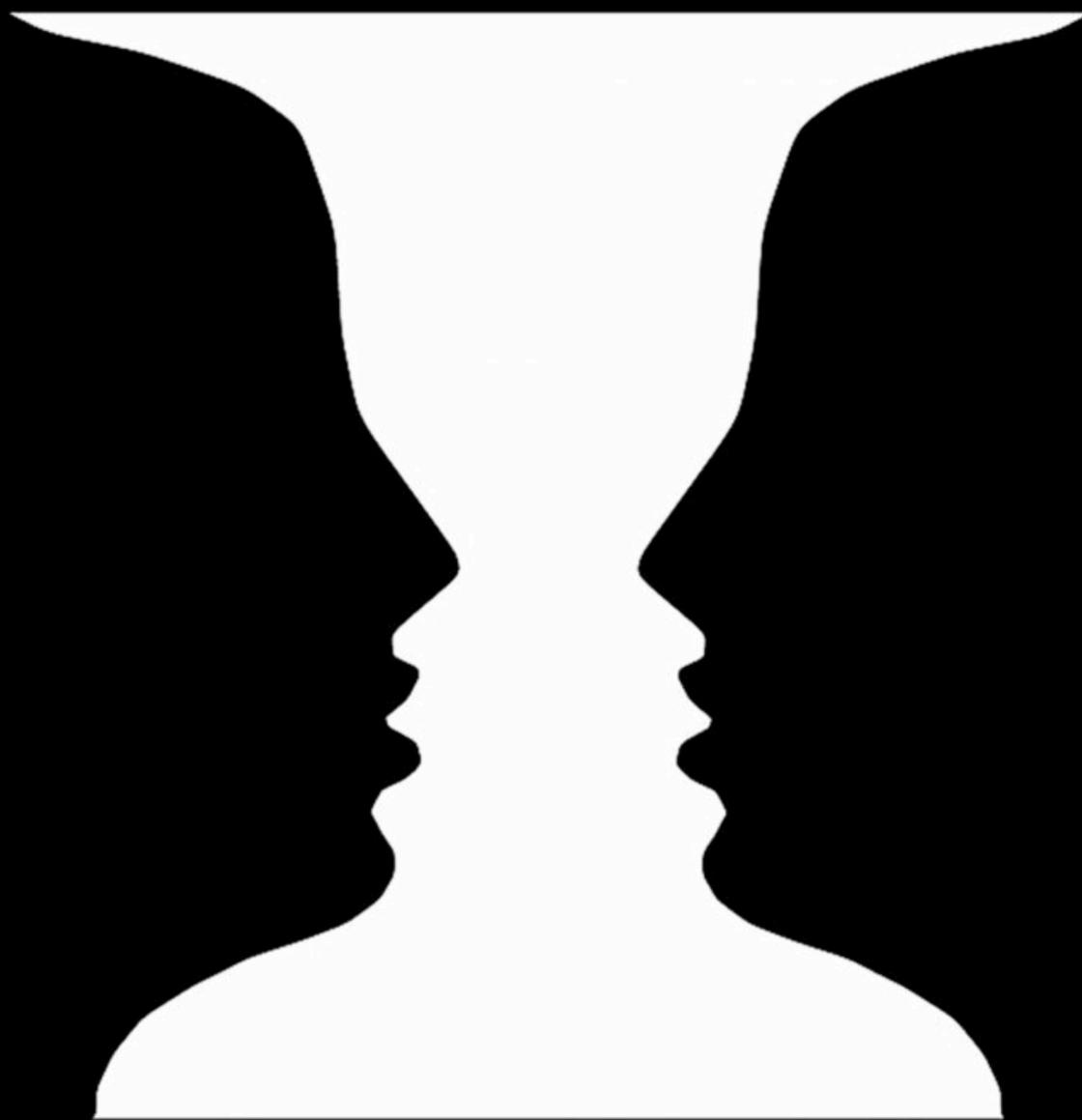
「授業のねらい」と「西洋近代主義」

(第1回：2016-11-11)

担当： 石井 拓洋

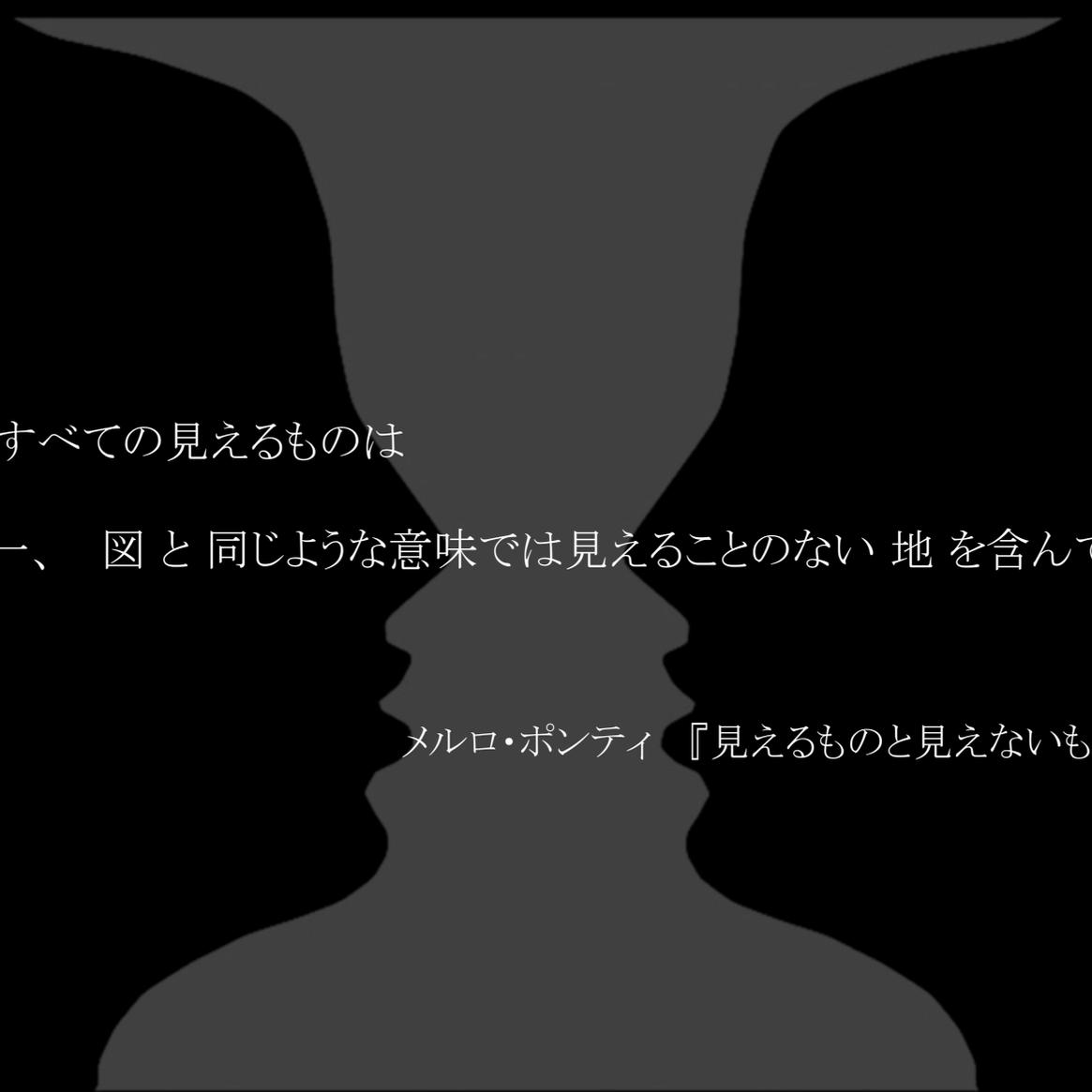
ishii05042@venus.joshiu.ac.jp

2016



「ルビンの壺」(多義図形)

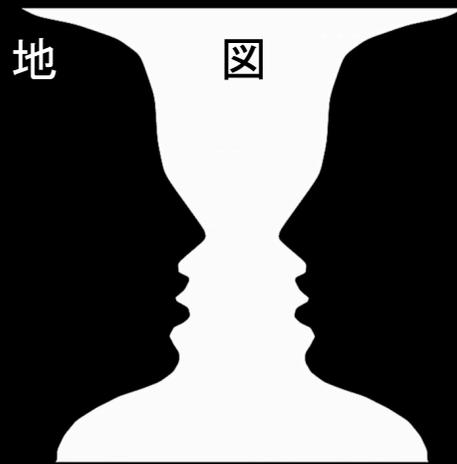
<http://d.ibtimes.co.uk/en/full/1426245/rubins-vase.jpg?w=736>

The image shows Rubin's Vase, a classic optical illusion. It is a gray silhouette of a vase with a wide, flared top and a narrow neck. When viewed from the front, the top rim is seen as the profile of a face looking upwards. When viewed from the back, the bottom rim is seen as the profile of a face looking downwards. The central neck of the vase is the shared area between the two faces.

「すべての見えるものは

一、 図と同じような意味では見えることのない地を含んでおり、」

メルロ・ポンティ 『見えるものと見えないもの』 p.360



- ・ ものごとは、一方に「図」があれば、かならずもう一方に「地」がある。
- ・ 「図」と「地」が共存することによって、はじめて全体が成立する。相互依存的である。
- ・ 「図」または「地」のうち、一旦いづれかに着目すると、もう一方が見え難くなりがちだ。
- ・ 「図」と「地」には優劣はない。存在としての水準は同程度である。

Ex.) 強者と弱者、中心と周縁、役にたつものと役にたたないもの、新しいものと古いもの、順境と逆境、男と女、陽と陰、、、

藝術文化研究のための「視点」の設定

- 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の知の **最大の変革** は、
物事を『**実体**』ではなく、『**関係**』として認識しようとすることです」

(小林康夫、船曳建夫編 『知の技法』 1994年、102頁。)

実体論 から 関係論 へ

substantialism

relationalism

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の知の **最大の変革** は、
物事を『実体』ではなく、『関係』として認識しようとすることです」

(小林康夫、船曳建夫編 『知の技法』 1994年、102頁。)

問いの方向性

「インタラクティブアートとは何か？」 というよりも (実体論, 本質主義, など)

「日本の一部では、なぜ そのアート に、興味をもたれるのか？」 (関係論, 構築主義, など)

【授業内容について】 (ここで扱うこと)

- ・ 世界の見方 (藝術概念、作品、結局、なにが問題とされているか?)
- ・ 藝術文化 (制作) 研究での〈視点〉の設定方法
- ・ 「実体論から関係論へ」 (20世紀の「知の最大の変革」)
- ・ 〈現代アート〉を考察する上で (本来) 不可欠な知見
- ・ 大学生として知っておくべきこと。
- ・ 独学ではむずかしいこと (大学で学ぶべきこと)

【授業形態について】

- 金曜日・週1回・全6回
- 基本的には講義形態
- 3限はこの教室で講義、4限は 普段の制作へ。その他対応。
- 「インタラクティブ」作品制作 とは、授業としては別のながれ

【資料での表記について】

- ・「」内は先人の言葉の引用
- ・〈〉内は専門用語、一般用語、語の強調。
- ・※印以下の記述は、教員個人の考えを多く含むもの

本日のメニュー

【本日のメニュー】

- この「授業のねらい」について
- 個別質問（作品の構想、現状、予定について）

※ 4限目におよぶかも？

【この授業のねらい】

シラバスにかえて

授業説明 - 授業のねらい（シラバスにかえて）

学ぶこと

- 〈西洋近代主義〉と〈藝術〉概念

- ～ これを批判的に検討する「視点」の存在と重要性を伝える授業

- 〈現代アート〉を考えるために不可欠な論点

- ～ 〈藝術〉の考え方を含み、広く20世紀以降の〈人文科学〉分野で共有されている重要事項にふれる授業。

- ～ 美大にかぎらず、ひろく大学生として知っておくべきことの授業。

- 独学ではむずかしいこと（大学でこそ学べること）

きんだい 【近代】

2. (modern age) 歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、一般には封建制社会のあとをうけた資本主義社会についていう (広辞苑 p.733)。

中世
↓
近世

11C頃「封建社会」
17C頃「絶対王政」を経過

(主従関係)



↓
近代

18C末「フランス革命」
「市民社会」の成立（封建社会の打破）

(自由と平等)

• 啓蒙思想 Enlightenment

- 17Cから18Cの 西欧における旧弊打破の革新的な思想
- 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、「**市民**」のための生活へ
- 啓蒙思想が「近代」を導いた

【授業のねらい 01/16】

環境問題、人口問題、民族対立、社会規範の喪失等をあげるまでもなく、現代のわたしたちが暮らす環境には、さまざまな問題が露呈しています。

これらの問題の多くは、しかし、**皆が被害者であると同時に、また加害者でもあるという構造に着目すべき**です。

つまり、誰も「高みの見物」を決め込むことは出来ないという**関係論に基づいた問題**がそこにあります。

【授業のねらい 02/16】

このような問題を考えるにあたり、必要となるのは、現代を形づくる上で用いてきた従来のな世界認識や、それに基づく思想風潮（イデオロギー）の、根底からの再考があげられるでしょう。

つまり、その批判的検討の主要な矛先は、啓蒙思想に導かれた、十八世紀の産業革命、市民革命以来の、西洋の〈近代主義〉的世界認識といえます。

【授業のねらい 03/16】

かつて〈個人〉を生み出し、科学を飛躍的に発展させ、
〈ユートピア〉を約束したはずの〈近代〉は、しかし、
アドルノらが正しく指摘したように^(注)、二度の大戦、
ナチスの蛮行、そして核兵器をもたらし、
すでに百年前に、むしろ〈野蛮〉を招くことを露呈しました。

注)：ホルクハイマーとアドルノ『啓蒙の弁証法』（1947年=1990年）

【授業のねらい 04/16】

また、〈自然〉は、いずれ科学の進歩によって人間が制御可能となるはずでした。しかし、巨大地震や異常気象に顕著であるように、それは、わたしたちの認識よりも、はるかに複雑で壮大なスケールを持つものであったと言わざるをえない状況です。

【授業のねらい 05/16】

さらに、かつては「野蛮なる未開人」と目され、いずれ、啓蒙されるべき存在と思われていた非西欧圏の人々の風習に、高等数学に基づく文化の構造を〈近代〉が見いだした時、その傲慢なる〈西洋中心主義〉的、かつ、そのあまりに楽観的な〈進歩主義〉的な〈近代〉の妄信は、ついに揺らぎはじめました。

【授業のねらい 06/16】

〈現代〉のわたしたちは、〈近代〉がもたらした科学的発展などの恩恵を継承しつつも、その一方で、今日の無視しえない問題を前にして、その **問題の主要な原因といえる〈近代知〉に基づく世界認識の批判的検討が求められています。**そして、批判的検討を通じた、いわば〈現代知〉に基づいた、新たな世界認識の構築が求められているといえるでしょう。

【授業のねらい 07/16】

現代のほとんどの学問領域（人文科学、社会科学、自然科学）の課題とは、つまるところ、このような〈近代知〉への批判的検討の諸相といっても過言ではありません。そして今、大学という、特殊な場に、あえて身を置きながら藝術に携わるわたしたちだからこそ、このような学問領域の文脈のなかで、藝術を考えていくことが、藝術の今後のあり方を考えていく上で、とても重要な営みになると考えられます。

【授業のねらい 08/16】

さて、様々な問題を含む〈現代〉において、
〈藝術〉に携わるわたしたちは、〈藝術〉によって、
いったい何ができるのでしょうか？
そもそも、〈作品〉を構想し、〈作品〉を作るとい
うこと、そこに、どのような意義を見いだすことが
できるのでしょうか。

【授業のねらい 09/16】

このような問題を考えるにあたって、
わたしたちは〈近代主義〉の考え方を注意深く検討せね
ばなりません。なぜならば、わたしたちが自明に思う
ような〈藝術〉に対する認識もまた、結局、おおいに
〈近代主義〉の考え方に取り込まれていると
考えられるからです。

【授業のねらい 10/16】

現代のわたしたちの多くが自明視する〈藝術〉における価値とは、およそ「芸術家個人の個性と内面性の表現」（松宮秀治『芸術崇拜の思想』p.14）と言うべきものではないでしょうか。

そして、古代から現代まで、いつの時代のどの地域でもこのような創造性や独創性にこそ〈藝術〉がつねに価値づけられてきたと自明視する向きも多いかもしれません。

【授業のねらい 11/16】

松宮氏をはじめ、現代の多くの識者は、
先のような〈藝術〉における自明なる価値の認識とは、
約二百年前頃の〈西洋近代〉という限定された時期と
場所によって形づくられたにすぎないことを指摘して
います。つまり、これらを勘案すると、わたしたちの
多くの〈藝術〉の認識は、結局、その根底では、いまだ
〈近代主義〉に影響されたままとも言えそうです。

【授業のねらい 12/16】

この授業では、様々な問題を抱える現代において、
〈藝術〉が何をしうるのか、その営みが、
どのように意義をもち・価値づけられうるのかを、
とくに〈近代批判〉という視点を軸として、考えてみた
いと思います。

【授業のねらい 13/16】

この授業でふれることは、また、**いわゆる〈現代アート〉を
考えるために不可欠な論点**です。なぜなら、そもそも〈藝術〉が
〈近代主義〉と不可分な関わりをもっているからです。**それが、
もし、本当に〈藝術〉として「新しい」というに相応しいものな
らば、そこには、かならず、近代〈藝術〉概念にたいする、意義
ある批判的検討の痕跡がみられねばなりません。もし、それがみら
れなければ、本来、すくなくとも、美大で取り上げるべき対象には
ならないでしょう。藝術とは違うものだからです。**

【授業のねらい 13/16】

もし、〈近代主義〉への批判的検討の視点が意識されないなら、過去の文化的偉人たちが藝術や文化の歴史のなかで、一体、何を問題としてきたかを把握することは、ほぼ、出来ないでしょう。つまり、過去の作家・文化人・思想家たちの思考が託された著作や成果物に触れても、一体、何が面白いのかすら分からないはずです。そのようなとき、偉人たちの瑣末な言葉じりをのみを問題にするしか出来ないことになりがちです。

【授業のねらい 13/16】

〈近代主義〉をどう捉えるか？ とする議論、つまり、知的営為としての大きな軸となる議論は、「古い」とか「新しい」などの水準で扱えるものではありません。強いていえば、すくなくとも、わたしたちが死ぬまでくらいの短い期間などは、つねに有効な論点として働きつづけることでしょう。このようなことこそを、大学で学ぶべきではないでしょうか？

【授業のねらい 16/16】

そこで、本年の授業は、
わたしたちの〈藝術〉的側面での「新しさ」を
うむための不可欠な認識的土壌となる〈西洋近代主義〉
についての認識を主に深めることをとくに企図してお
話したいと考えています。

きんだい 【近代】

2. (modern age) 歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、
一般には封建制社会のあとをうけた資本主義社会についていう (広辞苑 p.733)。

中世
↓
近世

11C頃「封建社会」
17C頃「絶対王政」を経過

(主従関係)



↓
近代

18C末「フランス革命」
「市民社会」の成立（封建社会の打破）

(自由と平等)

• 啓蒙思想 Enlightenment

- 17Cから18Cの 西欧における旧弊打破の革新的な思想
- 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、「**市民**」のための生活へ
- 啓蒙思想が「近代」を導いた

啓蒙思想の特徴 : 西欧「近代主義」の特徴

- **西欧中心主義** eurocentrism
西洋こそが世界で最も進んだ文明であるという考え
- **要素還元主義** reductionism
物事の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え
- **進歩主義** progressivism
新しいことは常に良いとする考え
- **人間中心主義** anthropocentrism
人間を 自然環境・生物 など 万物の中心とする考え
- **機械論** mechanism
人間は科学によって自然を制御することができるとする

藝術文化（作品制作）研究のための「視点」の設定

- 藝術文化（作品制作）研究の過程

1. 研究上の〈問い〉の明確化
2. 〈問い〉にもとづく調査によるデータ収集
3. 〈研究的視点〉によってデータを分析する
4. 研究上の〈問い〉の再考（1へもどる）

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 今日にもとめられる「研究的視点」

→ 西欧近代主義を相対視する視点（西洋中心、主体性、還元、進歩）

→ 知の権力性に批判的な視点（アルチュセール「国家のイデオロギー装置」等）

→ 正史（canon）を疑う視点（歴史と権力）

→ 周縁への視点（中心と周縁）

※ 西欧近代主義 = 「知」、「知の権力」、「中心」、「正史」

【今後の項目】

- 「近代的世界観」とは ？
- 〈自律美学〉、〈形式主義美学〉の帰趨と限界
- 〈言語論的転回〉と 実体論から関係論への移行
- 新しい言語観、「作品からテキストへ」、「作者の死」
- 作品の見方 : 「批評理論」の基礎 など、、、

個別質問

個別質問

【個別質問】

不十分でかまいません

- 制作の構想について
- 関心のある作家、作品、藝術的動向
- 関心のある制作手法、制作ツール
- 今日の藝術的動向などに関する 共感や不満
- その他、述べたいことがあれば、述べて下さい

以上